

《 à l'aube, les pas... 》  
(夜明けへのステップ)  
- pour orchestre -  
(2016)

神本 真理

■ 曲目解説

この作品では、「夜明け」という曖昧な時間帯についての描写を音で綴ったものではありません。

寧ろ、〈見えないところから、何か明るみを帯びた『未だ見ぬ世界』を見ようとする、淡い期待感〉のような感覚を、「夜明け」という言葉で比喩的に置き換えています。

そんな未体験の空間（形の曖昧なオブジェ）を、時系列に沿って見つめるのではなく、遠くから、また、近くから眺めるプロセスを、見る角度を変えながら少しずつ歩み寄り、限りなくクリアなものとして捉えていくさまを音楽化しようと考えたわけです。

いわば、ほのかに見え隠れする未体験の空間へと歩を進める、その架空の行為を、《夜明けへのステップ》という表現でメタファーとし、音に投影した幻想曲とでも言えまじょうか。

また、兼ねてからの私の創作のテーマ〈残響を聴くという点において、本作品では、随所に設けられたポーズにこそ、個々の聴き手によってしか得られない、各人固有の〈残響への〉耳の傾け方〉を自由に解放する場と考えています。

前記した〈未体験の空間〉に歩み寄る過程において、決して騒々しい空間ではなく、静謐な世界へと身を寄せていく期待感と、〈残響を聴く〉感覚とは、少なからず近いものがあるように思います。

私は、オーケストラという〈種々の楽器による集合体〉を、生命力にあふれた楽器達による社会構造である、と考えています。ですから、個々の楽器ごとに時折、ソリストイックな楽想が交錯することは、各々の楽器の〈ささやかな独り言〉を模したものだと思っています。

特にピッコロについては、打楽器パートにおけるバード・ホイッスルに呼応するかのよう、に、きわめて断片的であり、且つ、ゆったりと進む音空間に拮抗するかのようパッセージが度々登場します。

また、曲の随所に現れるハーブの断続的な動機は、この作品全体の有機性をも齎す働きをしています。

曲の後半において、懐古的なテイスト漂う〈お祭り〉のような部分が訪れますが、ここで聴かれる固有の拍節感は、やがて、限りなく音を削ぎ落とした終結部分へと導かれていきます。

〈艶やかな音像と、その残響への探求〉が、この作品の核となることを想定しながら書き進めた音楽であります。